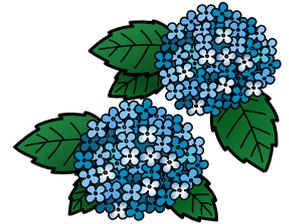




「協調性」

校長 黒田 宏一

道ばたにもアジサイの花が咲き始めました。先週は関東地方でも梅雨入りをしたとの声も聞かれ、季節の移り変わりを感じます。そんな様子を見るにつけ、いつも感じるのは「1学期の折り返しを過ぎた。」ということです。これからは、期末試験から学期末へとめまぐるしく過ぎていくことと思われまます。これまで以上に主体的にしっかりと学習に取り組んでほしいところです。また、学級活動、ボランティア活動、部活動などにも積極的に取り組み、望ましい集団作りやコミュニケーション力向上など「自分磨き」にも力を入れてください。



さて、第71回体育大会が行われてから3週間近く経ちました。「轟け思い 流せよ涙 我らの力で歴史を創れ」とのスローガンを掲げ、生徒一人一人がスローガン通りの体育大会を創り上げ、創立70周年にふさわしい行事にしてくれました。その要因は、全校生徒がスローガンをよく理解したこと、そのために皆が協調しそれぞれの立場でできることを懸命に取り組んだことが挙げられます。私の目には、悪コンディションの中朝早くから準備にあたった教職員を含め、そんな全校生徒の素晴らしい姿が今でも焼き付いています。こんな素敵な皆さんと共に生活できる時間を大切にしなければいけない、この持てる力がさらに大きくなるよう大切にしなければならない、心の底からそう思います。

「今、日本の学校や様々なところで問題となっている『いじめ』。日本は、いじめを防止するために様々な対策を実施しています。（中略）しかし、これらは本当にいじめ防止の根本的解決につながっているのでしょうか。」

平成28年度人権作文コンクールで内閣総理大臣賞に輝いた北海道の中学2年生（現3年生）、紙谷桃歌さんの『日本のいじめ対策は間違っている』の冒頭です。紙谷さんは、ドイツでの生活やいじめの経験と比較しながら、日本のいじめの一番の問題点は「いじめの長期化」であり、その原因は精神的苦痛を与える行為が多く周りから気付かれにくいこと、周りの見ている人たちの反応（気の毒に思いながらも誰も助けようとしなない、むしろ逆らえない）の2点を挙げ、日本には「いじめストッパー」がなくエスカレートすると述べています。その「いじめストッパー」になるためには、

①正しい善悪の判断ができること②自分の意見を持つこと③他人の意見を尊重することが必要不可欠な条件であるが、特に②を意識することが重要であると述べています。そして紙谷さんは、

「日本人は周りに合わせることを良しとするので、協調性にとっても優れているのですが、いじめの場合、この特徴は悪い方向に行きがちです。いじめは大抵一人対大勢なので、周りの人達は自然と人数の多いいじめ側についてしまうのです。こういう場合には、自分の意見を持ち、周りに流されずきちんと主張することが重要になります。私はこれこそが今の日本人が『いじめストッパー』になるために最も必要なことだと思えます。」

と訴えています。

あの体育大会で示してくれた皆さんの「協調性」と、誰も助けようとしなない（逆らえない）という「協調性」。言葉は同じですが全く違う意味です。正しい善悪の判断を持って、一人一人が自分の意見を持ちきちんと主張することができるようになってほしいです。何故なら誰か（一人だけではなく複数や組織の場合もあります）が主張しないと協調は始まらないからです。善の協調性を知る皆さんなら、協調すべきは何かを理解し行動してくれるものと信じています。折しも6月は「ふれあい月間（いじめ防止月間）」です。素晴らしいストッパーになれるよういじめ（防止）についても考えながら、冒頭述べたように「自分磨き」に力を入れてください。